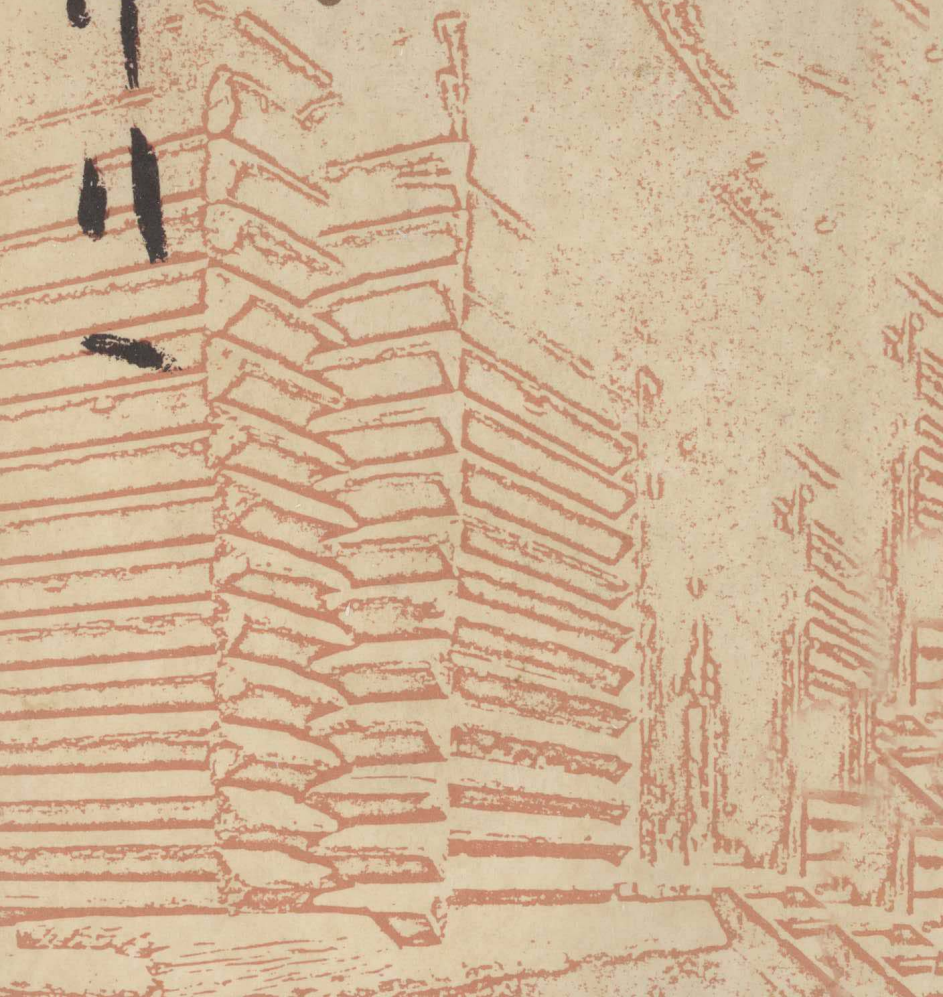


● 宮川 寅雄 ●

唐津川



會津八一

紀伊國屋書店

■著 作 者： ^{みや かわ とら お}宮 川 寅 雄

1908年生。1936年，早稲田大学政治経済学部中退。
現在，和光大学教授。著書「阿倉天心」（東大出版
会），「東ヨーロッパとの対話」（校倉書店），「近代
美術とその思想」（理論社），「会津八一の世界」（文
一総合出版）「画集驪光」（講談社）その他。

会 津 八 一

〈新装版〉

定価 1400 円

1980年7月31日 第1刷発行 ©

発行所 株式 紀伊國屋書店
会社

東京都新宿区新宿3の17の7

電 話 (354) 0131 (代表)

振替口座東京9-125575

出版部 東京都千代田区五番町12番地

電 話 (263) 4914-5 (編集)

(263) 9006 (営業)

郵便番号 102

印刷 中 光 印刷

製本 三 水 舎

Printed in Japan

落字・乱丁の際はおとりかえいたします

新装版によせて

紀伊國屋新書としてこの本を出版したのは、一九六九年十一月のことであった。依頼されて、これを書下ろしで書いた。その時のいきさつは、新書版の「序」に記したが、この「序」は、新装のこの版にも、そのまま載せることにした。

新装版の需めに応じたのは、私の会津八一像が、十一年を経過した今も、大体のところ、変わっていないからである。それに、この十一年間に、会津八一に関する新資料や著作も、いくらかは眼にすることができたが、それによって、この本を書き変えるまでの必要をみなかったからである。私自身は、新書版刊行後、「会津八一の文学」とか「会津八一の世界」といった随筆的、ないし論想的文集を出版したが、それらの書物は、本書を補完するものであって、本書のような伝記的形式をもつものではない。ちかごろ、会津八一の用印譜よういんぷを集めて「秋艸堂印譜」を刊行したが、これも資料的な意味をもつものである。

もともとこの「会津八一」は、将来あるべき伝記的記述のエスキースのようなもので、できたらこれを基軸にして、もうすこし詳しい述作を発表したいと思うのだが、著者の周辺は、その実現を

容易にゆるさない。だからとりあえず、この新装版を出そうという同じ書肆の、その担当者である
渦岡謙一氏に、すべてを委ねることにしたのである。

一八八一年生れだった会津八一は、まじかに生誕百年を迎える。それを記念して、本年末から
「会津八一全集」を改裝、改版、増補して、第三次印行を計画している。これには、可能な限り書
簡を増補し、将来の伝記的資料を豊かにして置きたいと思っている。そうした計画が実行され、資
料が豊富になれば、伝記的研究は、より稔り多いものとなるであろう。

私の会津八一に関する執筆量は、いまではかなりの量に達した。はじめから計画的にこうなつた
のではない。機会と運命がそうさせたのである。私はこれによって、先生の没後も、先生について
歩むことができ、先生によって、自分をいつものように正すことができたことを感謝している。し
かしながら、ひるがえって思うことは、世にすぐれた会津八一先生を、私の描いた像によって、誤
り伝えはしなかったかと、心が痛む。もし先生が御在世なら、一篇、一章にわたって、叱責をうけ
たにちがいないと思う。しかし、すべての不行届きは、後世がこれを正してくれるであろう。後世
を信じて、私の任をまっとうするしかない。

なお、この新装版では、旧版の語句、誤字その他を、許すかぎり訂正した。

一九八〇年六月下浣

序

「一たい美術をば、至上だの永遠だのと、誰が云ひ出したことであらう。さういふ御題目は、ろくろく美術の難有^{（なんいう）}みを知らずに疎末に扱って平気でやって来た世上のわからず屋には、充分に教へ込まなければならなかつたのであらうか。生命は東の間なれども、芸術は永遠なりなどと云って見てもつまりは人生あつての芸術にちがひなからう。芸術は人が作るのか自然に産れて来るものか、それはどちらにしても、とにかく人間あつてのことであれば、人間とともに変遷もあり、盛衰もあらう。そしてその背景の時代に、のびきならぬ関係があるものならば、時代の消耗を免かれるものではなからう。だから時代を超えた永遠性などを考へるだけ無駄なことである。吾々としては、唯いつの果までも、反撥と復活とをその将来の上に求めて行くべきである。これこそ人生に於て芸術を永遠ならしめる一つの道、恐らく唯一つの道であらう。」（会津八一全集「東大寺断想」第六卷）

私は、会津八一の、この言葉が好きだ。これほど、かれの人間、そして学問と芸術の質を、端的に言いあらわした言葉は、あまりみあたらない。このようなポレミックこそ、かれの創造と思索の発条となつたものだった。この叛骨のゆえに、かれは、たえず自己の学芸のオリジナリティを持し、

歪流と模倣を排斥することができた。いわゆる芸術のための芸術などと言うことは、じつは俗悪な非人間的なものであることを洞察しているのに感動する。明治以後の学芸を卑俗にし、退廃させていたものの、昏い権力の牙を、感覚的にまさぐりつつ、たえず抵抗をこころみた。しかしかれは、その総体と核心をあらわにすることはできなかった。かれの年代のすぐれた人々が、そうであったように、権力の栄光のかげの部分は、かれにもかくされていた。しかし、会津八一は、自己の学芸の道を碍げていたものを、部分的につきとめ、これに反撃をくわえていた。

私は、会津八一について、これまで、かなり多数の文章を書いてきた。しかし、いつも、師としてのかれの、強烈なその詩と真実が、私を呪縛するのだった。没後十三年を経て、いま、私は、この呪縛からなるべく身軽になって、客観的存在としての会津八一に迫りたいと思った。といっても、かれの裡から発するデモニッシュなものから、ように逃れ得ないのであった。かれに接触したものは、かれによって、人生と学芸を愛することを教えられた。このラジカルな事実は、終生、その弟子たることを運命づけられずにはいない。私もそのひとりである。しかし、私はあえて、会津八一の、わが裡なる母斑を確認したうえで、それをしようと心にきめた。つまり本書は、そのような弟子の記録であるだけのことである。

はじめに引用した会津八一の言葉を、かれの遺した文章から、しいて切りとったような、私のこの師への理解の仕方によって、描くほかはないのである。時がつくった距離をたよりに、かの畏怖すべき師を、怖れることなく、生きていたら、それこそ永久の破門も必至であらうようなことを、私

は書き記すであろう。私もやがて死ぬであろう。死んで会津八一に会えるなら、そこで、たくさん叱られる覚悟ができた、といっている。

私は、また、会津八一の生涯については、きわめて、貧しい知識しかない。そのうえ、太平洋戦争の災禍は、会津八一の生涯の豊かな記録を、ことごとく亡ぼしてしまった。このことも、私の作業を困難にし、記述をにぶらせるひとつの理由だった。しかし、誰かが、最初の記述をはじめなければならぬ。それは、新版の「会津八一全集」の刊行が、完結する時点に、こしたことはない。

会津八一は、晩年、その師・坪内逍遙についての執筆を志していた。私も、しばしば、そのもくろみを聞かされていた。衰老と病氣とは、それを阻んでしまった。その計画は、逍遙の一般的伝記を書こうというのではなかった。逍遙をその弟子の会津八一の視座から描こうとしたのであった。私の「会津八一」も、それにならうものである。既出の無性格な、視座の錯乱した会津八一像などを書く興味はない。会津八一を書くことは、一種のたたかいでなければならぬとしたら、それゆえに、伝記の力動感が保証されるとするならば、私もそれを敢てしなければならぬ。例えば、会津八一に対する不遜な思想的批判も、許されないこともなからう。会津八一の七十六年にわたる長い生涯は、政治からの自覚的、無自覚的欠落があった。そういうことも、私にとっては絵解きの対象となる。この、なみすぐれた一人の天才にして、そのような現実には、考察に価しないものではない。これもまた、師が弟子に教えてくれた反逆とか、反撥というもののひとつであるとしたら、この反逆をも、天上の師はゆるしてくれるであろう。

私をはじめて、会津八一に出会ったのは、一九二七年のことであるから、会津八一が四十七歳のときである。私は、いま、そのときの師よりも十三歳も年長である。それであるのに、当時の師の、いかに高齢にみえたことか。高齢というよりは、大人間、大碩学であったことか。会津八一が、いまの私と同齡の年は、一九四〇年である。そのとき、かれは、法隆寺をめぐる美術研究をすでに完成して、学問の功を遂げていたし、同じ年には、「鹿鳴集」を上梓し、永遠の芸術の碑をうちたてた。かえりみれば、立ち向うにも、立ち向える相手ではない。私は、汗を垂らし、手をふるわせながら、本書を書くはかないのである。

目次

新装版によせて

序

会津八一

出生と郷土

俳諧的世界

思慕

針村の生活

中岳先生

「南京新唱」

美術史家

私家版の歌集

一

二

三

三

四

五

六

六

八

豊 饒

戦 争

悲傷の詩

書 人

故山退隱

終 焉

付 篇

会津八一の怒り

語られざる言葉について

ある日の想念

乃木希典の殉死事件について

ノート「渡辺崋山について」

旧版後記

九

一二

一三

一三

一四

一五

一七

一七

一八

一六

一三

一七

会
津
八
一

出生と郷土

人の生涯は、いうまでもなく、その出生に始まる。だがそれは、その人にとって、意志的、自発的なことではない。人は、この、いわば、受けとった人生を、どう処理するかにかかっている。そのところにだけ、かれの責任がある。

人は、その受けとった人生が、異常であり、時として苛烈で、残酷きわまりない場合がある。そのような出生や出自が、その人の生涯を、長く、死にいたるまで責めさいなみ、その仕事にさえも影響を与える場合がある。会津八一がうけとった出生は、そのようなものではなかった。いってみれば正常であり、平凡でさえあった。しかし、だからといって、かれが、その出生と環境にたいして、ぬくぬくと安住していたわけではない。

かれが、郷土の世態の凡俗性に厭惡をもち、周辺の親戚を無視していたのを、私たちは知っている。かれが血族について語ることが、きわめてすくなかったことは、周知のとおりである。かれは、郷土と断絶し、自己がつくりだした芸術や学問の系譜を重んじ、それを、みずからの精神的郷土と措定しようとしていたこともあきらかである。にもかかわらず、かれは、しばしば、故郷の風物を想

い、望郷にかられて、新潟の風土と宥和しようとしたことも事実である。このことは、かれの内部に、出生と環境への抵抗と宥和とが、同時に、あいせめぎながら存在していたことを意味するだろう。

いまここに、会津八一の一通の戸籍謄本がある。それによると、会津八一は、明治十四年（一八八一）八月一日に、会津政次郎とその妻イクの二男として、新潟市古町通五番町で出生していることがわかる。八月一日生まれだから、それに因んで八一と命名されたことは、周知のとおりである。そして明治三十一年（一八九八）七月二十七日に、別家の親戚・会津サイの死に際して、同家以後嗣がなかったので、養子縁組をした、という記載がある。いわば、名義上の相続であって、実質的には、八一の身上にとって、なんの影響もなかった。

会津八一は、三男四女の第二子で、上から順に記せば、友一、八一、庸（たか）、琴（きん）、ヒン、ヤウ、戒三で、そのうち、四女・ヤウだけが夭折したが、他はみな成人した。かれの生家は、新潟古町の屈指の料亭・会津屋で、長い伝統と繁栄の歴史をもつ古舗だった。生母イクの弟・会津友次郎の息・弥六の手記に「会津家五代記」なるものがある、この会津屋の家譜にくわしいが、いまは、あまり必要なことではない。あまり必要がないということは、これから記述しようとする会津八一にとって、この家譜のごときものは、重大な役割をするものでないからである。

ずいぶん昔、私がまだ学生時代に、一度だけ、会津八一から、会津屋のことを聞いたことがある。その家は、遠く会津若松から出たということ、二代の金太というものが、博奕（ばくち）うちで、会津若松と新潟の間を往来していたというようなことだった。そのような血が、自分にも流れているぞ、と笑

いながら話されたのを記憶している。もともと、会津屋は、接客の女性を置き、酒食も出せば、宿泊もできるといった港町の料亭で、お上品な商売といったものではなかった。少年時代の会津八一が、自家の職業に、どのように反応したか、いまは知るよしもない。会津家譜に興味がないとしても、生母・イクが、いわゆる家付きの娘で、父・政次郎が、市嶋家から入った養子であったことは、注目している。

市嶋家は新潟の豪農で、政次郎は、その多くの分家のひとつ、葛塚町の市嶋家から、会津屋に養子にきたのである。政次郎が入夫したのは、明治十一年（一八七八）九月で、昭和四年（一九二九）六月一日に、七十六歳で没している。私は、その実父について、会津八一から、なにも聞かされたことがない。しかし、後年、昭和二十年十二月、戦災後に、新潟に退隠したのち、「炉辺」という連作のなかで、この父を追憶している。それには「予罹災のち西条に村居し一夜大いなる囲炉裏のほとりにてよめる歌これなり」という前詞がある。

ふるさとのほたのほなにかおもほゆるうらわかきひのちちのおもかげ
ちちわかくひにかよわししそんじゆくのかどもこだちもゆくへしらずも
わがこゑのちちにたりとなつかしむおもいまさずかへりきたれば
ちちわかくいませるころもほたのひはいまもみるごとくえつぎにけむ

などをふくむ十四首がそれである。いったい、私たちは、会津八一が、その父にたいして、どのような考えをもっていたか、知るところがない。のちに出てくる叔父・友次郎については、書きのこされたものが多く、むしろ、みずからの思想形成に、重要な契機をつくったものとしているのに、この父に就ては、無言である。それが突如として、周囲寂莫の故山に退隠し、戦後の窮乏のなかにあって、よみがえるように「炉辺」に表出されたのは、どういうわけだろうか。会津八一の口ずから聞くことのできない現在では、「炉辺」をたよりにするはかはなからう。すくなくとも、ここには、父・政次郎との葛藤は、痕跡もない。若き日の父の健康で、堅実な生活が描かれているだけである。しかも、それと、六十五歳の会津八一とは、まったくき宥和、融合がみられる。若き日の八一の、その父への評価が、たとえどのようなものであったとしても、ここからは、うとましさも歪みもみられない。多分、そのような父と子であったのだろう。それにもまして、一連の晩年の「炉辺」では、ただ愛惜の情だけがある。私は、それを、いくらか哀しいと感じないわけにはいかない。

生母・イクは、昭和十五年（一九四〇）十二月六日、七十九歳で没しているが、その逝去にさいしての歌詠はない。ただ、二年おくれて、昭和十七年の「瀬濁」八首のうちに、母を詠める一首を見出す。これが、ただ一例である。

くもりなきふたつのまなこたまひたるわがたちねはすでにいままず